

浄土

十二月號

目次

釋迦の成道……………佐藤密雄(2)	寺院藝能談片……………中村孝也(5)	念佛は一度だけでよいか……………眞野正順(10)	梵鐘夜話……………吉田宣成(8)	出家とその弟子……………藤田寛雅(12)	二つの願い……………佐藤良智(13)	芝園だより……………(16)
-------------------	--------------------	--------------------------	------------------	----------------------	--------------------	----------------



釋迦の成道

——十二月八日成道會にちなみて——

佐藤密雄

一、思念の座

十二月七日の午後であつた。釋尊瞿曇は菩提樹の下で金剛の坐と呼ばれる石上に坐した。數日以來、村長の娘が心を込めて造つて呉れた乳粥で、苦行に疲れた身心もすつかり健康を取戻したし、正面の正覺山の姿も、その前を流る尼連禪河のせゝらぎも、思念の快調さを感じさせてくれた。

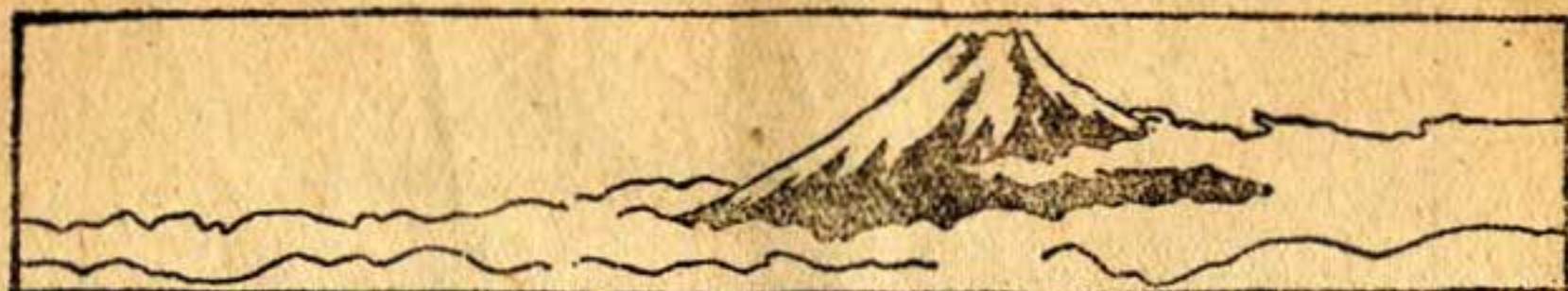
瞿曇は釋迦國の國主の長子であつた。地位と教養と天分に恵まれた此若人は、釋迦族の希望に應じて大國家を建設すべきか、或は時代の悩みを救ふ宗教を打ち立てるべきかに思ひ悩む青年の日を送つたが、意を決して宗教の道へ旅立つたのは廿九歳であつた。「生死の苦とその解脱」は千年來の問題であつたが、此の時代に至つて果然、世紀の課題となり、老死無常の苦が萬人の恐怖となつて居たのである。

人々は萬能なものゝ實在を信じて居た。其は神秘的な力であり、神であつて、人間の老病死をなくして呉れるもので

あると考へ、此を得る爲めに狂熱して人々は渦巻いて居たが、出家した瞿曇も勿論この渦に投じたのである。特別な瞑想法で神秘力を得ると言ふ方法の、いくつかを修習したが、いづれも無意味なものだつたので失望した。次いで苦行者達の集る苦行林に入つた。人々が種々な苦行に狂熱して居るのを見て、瞿曇は夢中になつた。次々と誰れよりも烈しく苦行し続け、行者達を驚かせたのであるが、六年の苦行は遂に極度の疲勞となつて倒れたのである。然し、同時に取りつかれて居た狂信からも醒めたのである。身心をさいなむことから、何物も産れないことを悟つたからである。そして今石上の思念は、人を此の様な狂信に追ひ込むものは何であるかを考へて居るのである。

二、内心の降魔

陽は正覺山の彼方に没して、よひの明星が光り初めた。思念の力は狂信の迷妄を破るに至つた。特種の瞑想や苦行で、神秘的ものを求めることに誤りがあるのである。人が



如何とも仕難い老や死の事實を、事實として承認しやうとせず、何か神秘な力を求めて此をなくしやうとする所に誤りがある。事實を事實としない妄執が神秘なものを妄想しその妄想したものを得やうと狂奔して居るにすぎない。妄想のぐるぐる廻しである。然し、人間に此の妄執が如何に深刻なものであるかを考へ、更に苦行者達の狂熱する姿に思ひ到つては、りつ然とした。そして此れが思念を停頓せしめたのである。

よいの明星は消えて一面の闇黒となつた。それに促される如くに、かつて生活した情痴の世界が思ひ浮んで來た。愛人を妻に獲得した時の、戀の勝利の思出、愛欲の満される甘味の持續、老ひたくない切實感、欲するものを自由にしたい征服感、「すべてを我が意志の支配下へ」此れが人間の眞實の叫びであると考へられる。思出の世界はやがて、うつゝの世界へ深まつた——一人の美女がうす衣を纏つて瞿曇に近づいて來た。數々の甘い言葉と媚態とで、そのすべてを捧げてかしづかんとし、瞿曇の自由な征服を求めたのである。情感の血の躍るにつれて、愛欲の世界へ轉落せんとする刹那、此れが妄執の根だと氣附いて理性を取戻した——同時に幻想は消えて、あたりは眞空になつた。

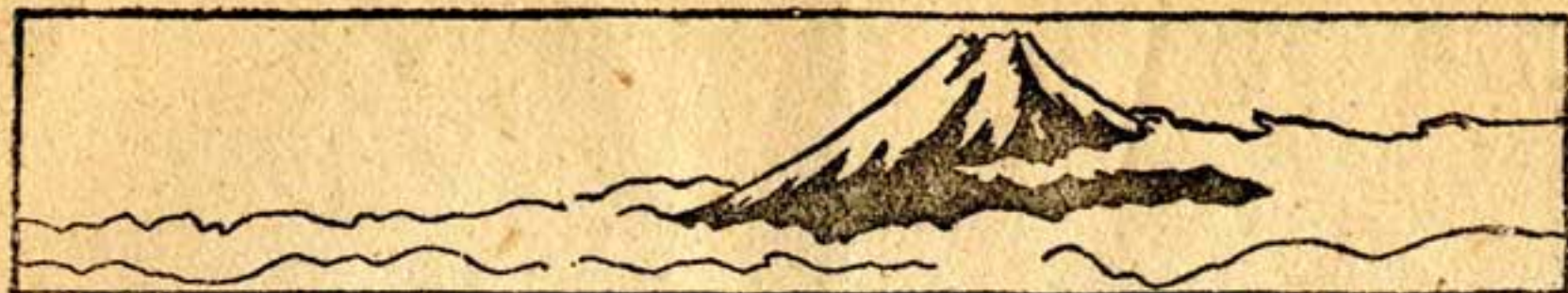
瞿曇の思念は進んだ。人が神秘な力を求めるのは老病死を苦とするからである。苦とするのは、人間にあつてはならないことと考へて居るからである。然し此れが誤りである。老病死は何人も否定し難い事實である。事實こそ眞理の現れである。萬物が生死することに依つて眞理の世界は

生きつゞけて居る。花は實を結ぶ爲めに木から咲く。そして實を結ぶ爲めに散ることは花に堪え難い死であるが、木には生きる相である。花の生死は木の生きて居るしるしであるが、花が神秘な力を求めて永生を求めるならば、自分を生かす、自分の生命の源泉たる木の生命を殺して、自分が生き様とすることである。妄執の眞相は眞實の生命への自殺的反逆である。花が木の生命を生命とすることを自覺して咲くならば、散り行くことが生々と生きることである。老病死の解脱とは、此の様なものでなくてならないのである。

瞿曇は思念し來つて亦停まつた。老死をのがれやうとして出家した自分ではあつた。自分に執着することが煩惱の根であるが、それは甚だ深い。かつての日、老人と死體とを見て恐れ、それが侍女達の肢體の上に結びついて離れなかつた忌しい思出が幻想されて來る——妖しい香氣に襲はれた。妖艶の美女が華やかな無數の侍女を従へて瞿曇を取巻いた。凡そ情感をそゝる限りのものを集約した媚態は、一瞬の反省の機も與えずに瞿曇の感情を引ずつた。然し、夢現の抱擁に沈み行く刹那、豐滿な肉感の中に突如として死骨を感じたのである——此れが呼戻しとなつて幻影から醒めた。そして思念は快調に戻つたが、夜半は既に過ぎ去つて居た。

三、思想の降魔と成道

諸行は無常である。變化こそ生きる相である。生かす眞



理に生きるものに老死の苦はない。世界を法身とし、眞理を生命とし、變化を生きる相とする時に人は生死を超えらる。瞿曇の此の考への前に、苦行者や瞑想者の主張は愚かなものとして、次々と打破されて行つた。然し思ひ返せば此等の妄見が世俗の眞實となつて居るのである。其處に正見の行はれ難きを憂えざるを得ない。憂ひは亦もや瞿曇を幻影の世界へ引き入れた——巨大な敵が「思念するを止めよ」と叫んで迫つた。瞿曇は無言であつた。此れに怒つた敵の大刀は、危くも寸前に落下して敵は去つた。然し、續いて現れた無數の敵は、軍鼓を鳴し幾千の刀槍をきらめかせて、瞿曇を石座から拂ひ落さうとした。「汝は神を否定するか」「苦行を笑ふか」「苦行を捨てた弱者よ」「神通なき愚人だ」等の罵言があびせられた。然し、攻め手の強勢さは、かへつて瞿曇の心を不動ならしめた。金剛の御座にき然として胸を張つた時に、惡魔共の勢ひはひるんだ。同時に幻影の世界は消え去つた。

瞿曇は「我れ勝てり」と思はず叫んだが、其の言下に轉心した。大悟成道したのである。此の後四十五年かゝつて説き示された佛教が、心中に成立したのである。

釋尊瞿曇は佛陀となり給ふた。いつしか夜は過ぎて正覺山の上には曉の明星が輝いて居た。やがて東の空の曙紅が端坐し給ふ佛陀を浮彫にし、尼連禪河に黄金の波がきらめいて來、佛教の夜明が朗々と開けたのである。

此れは今から二四八〇年前の十二月八日のことで、釋尊の生年は三十五歳であつた。

狂信の迷妄

天下太平、天下太平、國民揃うて天地の御氣に召します上は、必ず住みよき神國を與えたまえ、

六根清淨、名妙法蓮華經——

こおした「お祈の詞」をとえ終ると、やがて同志——信者をこのような言葉で呼ぶことで、彼等は近代的擬裝をしたつもりでいる——彼等の熱狂的な踊りが始まる。爾光尊事件のあとをうけて、新興宗教陣に名聲？をたかめたのが、この「踊る宗教」である。四十九歳、十八貫の北村サヨという女性オオ神サマに率いられた同志の一群が東京に進出しての狂信舞踊は、いまだ記憶に新たなところである。しかし私たちはそれとともに新聞などのチャイナリズムが示した報道態度の反理性的なものにもまた一驚した。

われわれは狂亂の過去十年、日本の敗戦を通して何を一體學んだのだろうか。批判なき追従、知性なき狂信、そのいかに危険であるかを身をもつて経験したのではなかつたか。戦後の世相、人心はたしかに宗教を求めている。しかしそれは決して新興類似宗教のはんらんを合理化するものではない。「若し人類がこんどの戦禍から得た教訓を無にするようなことがあれば、われわれの將來にはどれほど恐ろしい事態が起るかも知れない」という、トーマスマンの言葉を味うべきである。(藤田)

寺院
藝能

伎樂談片

中村孝也



寺院藝能の初期に、伎樂の名が見える。聖徳太子傳曆卷下に推古天皇の一廿年、百濟の味摩之化し來る。自ら曰ふ、吳の國に學んで伎樂舞を得たりと。

則ち之を櫻井村に置き、而して少年を集めて習傳せしむ。今、諸寺の伎樂舞是れ也」とある。百濟の國から味摩之といふものが歸化して、吳の伎樂を傳へたので、習傳させたものが、諸寺に傳はつたといふのである。

伎樂の保護者は聖徳太子であつた。太子奏して諸氏に勅し、子弟壯士を貢して、吳鼓を習はしむ。又令を天下に下し、鼓を撃ち舞を習はしむ。太子從容として左右に謂つて曰く、三寶を供養するに、諸蕃の樂を用ふ。或は學習を肯てせず、或は習うて而して佳からず。而今、永業習傳宜しく課役を免すべし

と。即ち大臣をして之を奏免せしむ。太子は三寶供養のために、課役免除の特典を與へて、伎樂を習得せしめたのであつた。

伎樂は本質から言へば、滑稽を旨とする假面的劇舞であつて、寧ろ民間樂の要素に富んでをつた。しかし太子の頃には、純然たる佛教樂が無かつたので太子はこれを寺院樂舞として採用したのであらう。それが佛教的内容を有する蕃樂であることが、縁にはなつてゐる。

寺院で育まれた伎樂は、とにかく成長していつたらしい。大和國高市郡高市村川原に齊明天皇の造立せられた名利があつた。川原寺ともいひ、弘福寺ともいつた。この寺の伎樂は、外國人に見せても恥かしくないくらゐに成育したと覺しく、天武天皇朱鳥元年四月新羅の使者を饗應するため、その伎樂を筑紫に運んだと、日本書紀に記してある。

伎樂は傳來の時期が早かつたのと同じく、衰亡の時期も亦早かつた。宮廷の保護を受けた彼女は、あとから參入した壯麗な大陸舞樂に押し退けられて、雅樂寮から姿を消した。とはいふものの、もとく御佛の袖に庇はれて成人した彼女は、寺院藝能として、安住の地を失つてはゐない。

天平勝寶四年(七五三)大佛開眼供養の盛儀に參して、伎樂が奏せられた。その時の晴れやかさを偲ぶかのごとく、今でも東大寺に二十八面の伎樂面がある。正倉院御物の中には、百六十四面が残つてゐる。法隆寺に在る三十一面は最古のものといはれる。

大安寺には天平二年七月、伎樂二具の納賜があつた。筑紫觀世音寺所藏の韓櫃の中には「吳樂儺」の調度が入れてあるといふ記載がある。

「吳樂儺」と記してある。その吳樂(クレガク)は即ち伎樂(クレガク)とある。伎樂と書いてクレガクと訓むのである。

クレ(吳)は地名であり、國名とも考へられ、日本書紀にも、しばしば出て来るけれども、その所在は餘り分明でない。一般には揚子江の河流、古の吳

の地方が聯想されてゐるが、クレはクレであり、吳は吳である。このクレと吳とを結合して、吳をクレと訓むに至つた徑路が明瞭にならない。異説が多いが水掛論に終る。

推古紀廿年の條には、太子傳曆と同様の所傳を載せ百濟の味摩之が吳(クレ)に學んで、伎樂儺(クレノウタマヒ)を修得し、來朝歸化したので、少年を集めて伎(クレ)の樂儺を習はせたとある。百濟は夙に江南の諸朝と交通してゐたから、吳の地方の文化が、百濟經由で日本に傳來したといふ説話には筋道は通じてゐる。

味摩之は西藏語の「不死人」・「聲樂者」・「藝術家」といふ意味の言葉であり、百濟の人名ではなく、その傳來の樂舞は、印度・西藏系の樂舞であるといふ説も存在する。

伎樂(クレガク)は、西藏源流のものではないかも知れない。しかし印度系の佛教樂舞ではあらう。

伎樂が宮廷で繁榮しなかつたのは、隋唐樂に壓倒されたことのほか、寺院保護政策の溫床に甘やかされて、苦勞が足らず、自己改善の努力のなかつたと

いふ事情もあるが、それよりも、伎樂自身の佛教的性格に累せられたためである。所詮彼女は寺院藝能の道を行くのが本筋であつた。

それはまさしく行道藝能として寺院に残存した。

鎌倉時代の樂書教訓抄に、その次第が記してある。

その行列は、治道といふ先拂に次で、樂人が先に立ち、次に獅子、次に踊物（伎樂師）、次に笛吹、次に帽冠、次に打物（羯鼓・太鼓・鉦鼓・銅鉦子）といふ順序で金堂を一巡し、その正面に設けられた舞臺（ブダイ）で伎樂を演じたのであつた。

伎樂の演出は、一連の構成をなしてゐる。獅子舞から始まつて吳公・迦樓羅・金剛・婆羅門、それが終ると演舞の場所を金堂と舞臺との中間なる庭上に在る燈廬の前に移し、崑崙・力士を演じ、次の大孤に至つて佛前で禮拜し、醉胡が醉態を演じた後、舞の無い武德樂の奏樂があつて全部終了する。本來は庭上の樂舞であつたが、後に舞臺を設けたものらしい。

今日、神社の祭典の行列の先頭に、天狗の面を着け、高足駄を穿いた猿田彦命といふものが行くのは伎樂行道の先拂の治道から起つたものである。列中の獅子舞に、親獅子と一しよに兒獅子が舞ふのがある。その面影は今の神社祭典の獅子舞に、山の神と

いふ兒獅子の舞になつて残つてゐる。

獅子はライオンである。獅子舞はライオン舞である。ライオンは印度以西に棲む。さればライオン舞は印度以西に發祥したものと推定し得られる。今日遍く行れてゐる獅子舞は、伎樂の中より流出したのである。

伎樂は曲目の名稱だけでも推考し得られる通りの佛教樂舞であるが、嚴肅莊重なるべき宗教樂舞たるよりも、寧ろ素樸なる民間樂舞に近い。滑稽諧謔の趣を含有する散樂的藝能といふ方が適當である。迦樓羅は印度神話に見える怪鳥で金翅鳥と譯し、伎樂では蛇喰（ケラハミ）と呼んでゐる。婆羅門は「ムツキアラヒ」と呼ばれ、破戒の婆羅門僧が嬰兒の襁褓を洗ふ所作を演ずる笑劇である。崑崙・力士は合せて一曲となる。五人の美女に崑崙人が挑みかかるのを金剛力士が出て崑崙人を押へ、美女を救ふ滑稽劇で、ギリシヤのデイオニソスの舞とも關聯を有する。マラフリ舞ともいはれる。大孤は老婆が繼子に腰を押させて寺詣りをする態、醉胡は胡人が酒に酔うて亂舞する態、全體を通じて、面白可笑しく笑はせようとしてゐる。

伎樂の演奏をみそなはす御佛も、破顔一笑、上機嫌でおはしますであらう。（文學博士東大前教授）



梵鐘夜話

吉田宣成

何事もすみたる除夜の火鉢かな 竹人

しん／＼とふけゆく夜半、炬燵にぬくもりながら、除夜の鐘に聴き入るひと時、人はしみ／＼と時のながれ、年月のうつりかわりに氣づくものだ。年が易る、年が改まるとゆう古く云いふらされて來た言葉のなかに、舊き年を送り、新しき年を迎える「除夜」の意味が示されている。なぜなら、シナや日本の古い書物には、大晦日のことを歳除とか除日など、記して、除を「易る」と訓ませているから、除夜・除夕も一應は新舊の年がいれかわる夜と云うことで合點がゆく譯だ。むろん、人々の心のうちでも、年々歳々この夜を限りとして、すぎこし年を清算し、來るべき年へ向つて、その心がまえを改めようと希われているのは、云うまでもないことであらう。しかしなお、もう一步すすめて、「除」と云

う文字に次の意味のあることを知つておくことが大切だと思う。それは「除」が、除く・拂う・淨めるなどの意味を含んでいると云うことだ。従つて、心を新にすると共に、陰に陽に、そして個人的にも社會的にも犯して來た舊年のさま／＼のいまわしい惡業を拂い除き、さらに淨めて、心機一轉無垢の新年を招き迎えると云う心持が加えられるべきだらう。こんな風に除夜の意味をたずね、その心がまえを辨えるとき、百八のまよいを入念にとつひとつ取り除き、心を淨め身を清める爲に撞き鳴らされる除夜の鐘の、宗教的眞意がはつきりしてくる。刻一刻ふけてゆく夜半のし／＼に、鳴り來り鳴り去る寺々の鐘の音に何人もひと時は雜念を洗つて、しみ／＼おのれの來し方行く末に心を留めずにはいられぬことだらう。

さて前置きはこの邊にして、今夜は除夜の「鐘」に因んで、二三やゝかびくさい、梵鐘にまつわる傳説・俗信の話をしてみよう。

第一話 無間の鐘のこと

この俗信は、すでに室町期の記録にみえるところから、どんなことが原因となつたかわ知る由もない。ともかく代表的なものと云えば、例の夜泣石で有名な、遠州小夜の中山觀音寺の梵鐘で、かい摘んでその筋を云つてみる。この梵鐘を撞いた者は、この世では金銀財寶の富を蓄えることが思ふまゝに出來るがあの世へ行つてからは、絶えまのない苦しみにさいなまれる無間地獄に墮ちこまねばならないとのことだ。それが江戸中期頃より戯作者の手にかゝつて、芝居・淨瑠璃或いは讀み

本などにとり入れられ、後世に至るほど眼先の變つた新趣向がこらされたりして、例の「梅ヶ枝の手洗鉢叩いてお金が出るならば云々」の俚謡にも関係があるくらい、俗間に流布されたものだ。ともあれ俗信としての狙いは、梵鐘にこもる怨念の無氣味さをかりて、現世の私利私慾をのみ追い求める人間のあくなき醜惡面を、陰に戒めているところにある。

しかしその眞意を知つてか知らずか、あいも變らず撞きたがる罰あたりが多いので、見るにみかねて住僧が、罪つくりな鐘を秘かに地中へ埋めてしまつたとか云う。嘘か本當かその後にも鐘を埋めたと覺しい地面を、足高かに踏みつけたりして、この世かぎりの幸運にあづかるうと、躍起になつた輩もあつたとか云う。

第二話 鐘ヶ淵のこと

いまでも地名で、鐘ヶ淵とよばれている所はかなり多い。もつともこの傳説は、淵だけにかぎらず、川海湖池など、とかく水に縁の深いもので、ひつくるめて沈鐘傳説と呼ばれ世

界の各地にも同じ類のものがある。さて日本傳説集にこんなものがある。「越後國柏崎の西、

西光寺の下の鶴川に、鐘ヶ淵というところがある。むかし西光寺の鐘が夜なく、海へ行こうか川へ行こうか、と鳴るので、住職が持てあまし、海へなり川へなり好きな方へ行くがよいと云つたら、鐘の龍頭が忽ち切れて鐘がごろ／＼轉んで、下の川へ行つて沈んでしまつた。その場所が今の鐘ヶ淵だ」と云う。

その他どれをみても、これに類した、たわいのない民譚だが、おしなべてどの話も、沈没のきつかけが、水神・海神・龍神ないし蛇神が羨望したからだとか、魔力を使つたからだとか云うことになつてゐる。そしてもちろん、よからぬ災厄をよぶと云つて、その附近に立寄ること、その鐘を引き上げることが、かたく禁じてゐるのは、この種の傳説にありがちの俗信である。或いはむしろ、事實はこの逆であつたかも知れないが。いずれにしても、現代人ならば、危険につき立入禁止の立札をかゝげる代りに、假空の動物、龍の頭をいたゞく梵鐘をかつぎ出して來たところに、古人のロマンチストぶりが羨しい。

第三話 雨降り鐘のこと

これも梵鐘が水に縁の深いことを教えてくれる俗信のひとつ。一體雨乞ひの行事は、未だに昔ながらのことが、あちこちで行はれてゐるらしい。こゝに雨降り鐘と云うのは、旱天に雨を祈請するとき用いられる特別な効驗をもつ梵鐘のことだ。まずその一つを話してみよう。豊前田川郡伊田村に、淨土寺と稱する一寺がある。そも／＼この寺の鐘は、いづれからそうなつたのか明かでないが、本堂裏の泉に陥込んで終つてゐる。ところがである。龍神が惜しむと云うのでもあらうか、早魃には里人が祭つて、くだんの泉を掘りかえずと、たちまち雨が降つて來るとのことである。それでもなお雨が不足ならば、龍頭に繩をむすびつけて引動かすと、必ず大雨がやつて來るなど、調節自在の代物ださうだ。いずれは人間の拔目なさ、水に沈んだ恐ろしい梵鐘の魔力を善用應用して、慈雨にあづかるうとの魂膽である。

梵鐘三題、いずれも鐘の怪奇談。思えば除夜の鐘すらも、むかしは梵鐘の魔力の善用であつたかも知れぬ。

信仰問答

念佛は一度だけでよいか

回答者 眞野正順

問 お念佛は「たすけ給へ 阿彌陀佛」といふ意味ださ

うですが、それならば、眞心こめて一度だけ唱へれば、それで佛様に通じるわけで、何も繰返し々々數多く唱へる必要はない。くどく繰返すのは、まだ、ほんとに救つて貰へるかどうか不安があるからで、信仰の薄い證據であると言ふ人がありますが、いかがですか。

(神奈川縣藤澤市吉村生)

答

もとより御佛は、私共が一念まごころを開いて「救ひ玉へ」とねがふ聲に應じて、たゞちに救ひの手を垂れさせ玉ふのであります。凡夫の果敢ない念佛の數を積むことなぞに依つて、この「大きな救濟」をつくる事なぞ決して出来ません。救ひはすべて御佛の御力で

然し、それならば、一度念佛したきりで、あとは放つておいてもよいか。お念佛するのは、淨土行の入場券を買つて置くのとは違います。一たび佛に歸依し奉つた上は、わが生涯は常に佛の光の中にあり佛の御心のごとく生きてゆかねばなりません。それが本當の信仰の意味であります。それならば一度彌陀佛に歸し奉れば、そのあとはそのまゝ自然に我心はいつも御佛に向ひ御光と共にあつて進んでゆくでありましたやうか。悲しい哉、人間はそんな立派な存在ではありません。一たびは涙を流して佛に感謝し歸命していながら、しばらく後となればその熱情はうすらぎ、心はいつか御佛から離れゆき、はては佛のことなど、どこかに全く忘れ果てた自分を見出すのであります。それが人間のあさましい現實の存在のすがた、すなわち實存であります。

一たび佛に歸命すれば、あとは、いつまでも、その喜びの報謝を繰返していられるといふ人は、よほどの妙好人——宗教的天才でありましょう。現實の人間はともそんなものではない。私共は刻々に轉落し墮落してばかりいる存在であります。御佛の大いなる慈悲を喜ばんとしながら喜ぶ心が起らず、佛と共にあらうと願ひながら

心は自らあらぬ方に外れて闇の中をさまよつてゆく。自分でこの自分はどうにもならぬ、まことに浅ましい存在、それが私ども人間であります。それゆえ、わずかに口に唱ふる佛名をたよりとして、我れとみずから見失つた佛の影を求め、それに歸つてゆく。それが私共の常念佛なのであります。

法然上人も言はれました「一念なほ生る」と。救ひにあづかる事はたゞこの眞心をかたむけて「南無」と申せばそれでよい。救ひはそれで決定しますが、それは云はゞ佛の立場からのことです。救はれる凡夫、私としては、そう言つてゐる内にも、たちまち轉落し、光に背いて自分で暗に跳び込んで孤獨の苦しみに墮てゆきます。救ひの御手はすでに我背にかゝると知りながら現實の私は、それに背いていよいよ暗から暗へと進んでゆくのです。

しかし救はれた限り、いつもその喜ばしい光明の中に居り、明るい佛の道を踏んでゆかねばなりません。そう願はない人は、實は眞に救ひを求めているのではないのです。それ故、私共は絶えず轉け落つる我身をわれと自ら支えて佛に向け、佛を求め、ひしと佛に纏りついて離れまいとすることゝ、その聲が念佛です。もとより、これとても果敢ない凡夫の努力にすぎぬでしやう。しかし果敢なしと知りつゝ然も大いなる御力の現在を信じてそのことの成就を知る。それが私共の念佛であります。二祖上人が「不離佛」「直遇佛」と云はれたのも、この意味と考へられます。

それですから一たび信仰おこつて後の念佛は、かたじけなき御恩を思ふ報謝のこゝろを意味する時もありましやう。たゞそれだけに

限りません。いつかまた見喪つてしまつた御佛の姿をさがし求める懺悔の叫び。或は、思ひ見るたび、いよいよその深き尊嚴を知る嘆賞。或は、この一身をこめて、たゞひたすらに佛の御道に隨ひまつらんとする懇求。それら種々の思ひをこの名號の中に込めて私共は念佛するのです。それはたとへば慈愛ある親様の前にある幼児の如くです。僅かの片言の中に千萬無量の思ひをこめて呼びかける。そのやうに、信後の一切の思ひを悉くこの佛名一つの中にこめて、私共は佛様になげかけるのです。

かくする事によつてのみ、眞に常に佛の中にある事が出来る。一念で済むと云ふがごとき、ごく浅薄な理屈にすぎません。



人生の淋しさは酒や女で癒されるような浅いものではないからな。多くの弱い人は淋しい時に酒と女に行く。そして益々淋しくされる。魂は荒らされる。不自然な、險惡な、わるい心の有様に陥る。それは無理はないが本道ではない。強い人はその淋しさを抱きしめて生きて行かねばならぬ。若しその淋しさが人間の運命ならば、その淋しさを受けとらねばならぬ。その淋しさを内容として生活を立てねばならぬ。宗教生活とはそのような生活

假面をぬぎすて、冷徹な眼で現實を凝視したときに、灰色の天地に、灰色の心で、冷たい物凄く荒んだ生を送るのが、人生の本旨ではないか、とさえ考えた。しかし一方には赤い血の色や青い空の色も欲しいとゆう氣持が減しない。こうした息づまるような暗さに陥つた自然主義末期に、明るい希望と光明をもたらしたものが、武者小路實篤などによる文學運動、とゆうよりはもつと廣汎な思想運動ともゆうべき「白樺」の運動であつた。

出家とその弟子

——木の実座公演——

のことを云ふのだ。耽溺と信心との岐れ路は際どいところにある。——

倉田百三の「出家とその弟子」の親鸞は、遊女かへでの戀の苦惱になやむ若き弟子唯圓にこう語つてゐる。想えばこの作品が發表されて、當時の思想的青年層の魂をゆすぶつてから、もう三十年の年月が流れている。

明治に於ける日本の近代文學が歩んで來た人間探求の道は、自然主義の現實暴露の悲哀を味い、救いのない人生に絶望した。全ての

もうしかし卅年たつてゐる。當時の有樂座で初めて上演されたときの若き観客は、いまは老年である。しかし荒廢した現實は、再びこのすぐれた宗教文學から何かを汲みとることが出来る。

森鷗外子の「木の実座」が第一回公演に之をとつたことに、もおした意味があるかも知れない。新橋演舞場には若い學生が目についた。卅年を隔て、いまの青年層は之に何を感じとつたであらうか。しかしそおゆうにはあまりにも淋しい「出家とその弟子」の舞台である。原作が短縮されているせいもあるが若き唯圓と遊女かへでの戀の苦惱が親鸞の深い愛の下に傷くことなく成就されてゆく姿が原作での第六幕一場が略されているためにぼやけている如きその一例である。こまかな批評はこゝでは紙數もないが「時代考證は鎌倉時代を密に調べた」とゆうのに黒谷墓地が現代風の墓石がお粗末に並んでいるのはちとどおかと思う。五日最後の日の午後、録音放送で聞かされた方々が退屈を感じなかつたとしてそれは放送の成功である。(藤田寛雅)

この自然主義の克服、「愛」による新しい人生肯定の立場は、芥川龍之介の言葉を借りれば、當時の暗うつた文壇の天窗を開け放つて爽やかな空氣を入れ、大風のような雄々しい力をもつて當時の青年に理想主義の火を吹き込んだのである。倉田百三はこうした潮流の中に思想的成長をとげると共に、「出家とその弟子」によつて當時の若い人達の魂をゆり動かした。たしかにその言葉は、われわれの胸にしみこむものをもつてゐる。

二つの願い

佐藤良智

一

人の世は寂びしく、生きることはくるしい。戦後めぐりくる幾度の年の瀬に、戦前、戦中、戦後の世の移り變つたすがたを、そしてわれわれのこゝろのうつり變つて行つた様を泌々と思ひいださせることしきりなものがあつた。これこそ變らないもの、世に尊きもの、強きものと思ひこんでいたものが、どの様に、もろくも崩れて行つたことであらう。榮えるものやがて衰えることわりを讀み、教へられもしてきたが、まのあたりそのはげしいすがたをみせつけられていたく當惑しているとも言ひ得よう。世常の鐘の音をきかなくても歳の瀬に耳をかたむけなくても、靜かに目を閉づることによつて奇しきすがたが觀ぜられる。「あせみづたらして」その半生或は全生をもつて築きあげた富が、それのみか、世々、幾代かの努力によつ

て積み重ねられた財も、眼前に於いて一朝に崩れ去つてしまつた。この「くづれ」は、こゝで止つたのではない。とめどもなく崩れてゆく。この世紀のうちに世は、幾轉變するであらうか。

「世はうつろ」「世は虚無」。われわれの心の底から、生活のどん底から不安なものがゆり動いている。何か深い淵にでも立つている感じである。こゝろにしのびやかに訪れる陰の聲はこれである。このありのまゝのすがたに目をそむけてはならない。このくにの過去のひとびとの唯よりも明らかに、われわれはこの陰の聲をきくのである。世は「うつろ」虚無をもつてその主義とし、主張とする多くの人を世界の歴史のうちに多くみることが出来る。わたしはその様なことを主義とすることには輕々しく賛し得ない。たゞ、事實、この感の深いことをこの心をもつて、この生活をもつて、この世代をもつて知るのである。昔のひじり、聖徳太子が「世間虚假」世の中はうつろなもの」と言われたことばを實感をもつて知るのである。

二

さて、この不安に根こそぎ揺ぎながら、他面、ひとは、強く「生きたい」という欲望にかりたてられている。戦後において、生活の不安に應じて、一方、生きようと望むこゝろの根深かさにおどろかされる。すべての垣をやぶつて生活力は伸びている。闇は根深い生活力の現れであろう。人の作つたおきてである垣はそれよりも強い生活力のために破られる。この「生きよう」とする意欲はあらゆる人の世の約束ごとを押しのけて流れる。戦後のこのくにの犯罪と言われるものは、この垣を破る音でもあらうか。この面からも社會の崩れてゆくのがみられ、寒々とする。そしてこの崩れは人間の作つてゐる社會の崩れのみならず人間そのものの崩れともなる。この崩れの大きくゆらぐことは、その源が人の生きようとする力に基きながら、その力によつて却つて人間そのものが崩れ去るものと、なる。社會の不安は人間の不安であり、人間の不安は社會の不安である。この様な不安にかこまれながら人は生きている。また、限りなく生きようとする。

地上のありとあらゆる權威が失われ、人間もそれ自らの力によつて崩れようとしている時、人ははげしく生きようとしている。この様な時にこそ人は宗教が必要だと言うであらう。まさしくその通り

である。しかし、この様な切實な時に、外から強いられ與えられる宗教が、いかになさけなく、力弱く思われるであらうか。宗教は内から湧き出るものである。宗教には宗教として「型」があることはたしかである。しかし、それはあくまで「かた」であつて本當の生きた力ある宗教は、絶體絶命の時に、自分自身のどん底に落ちきつた時に、自然に内から湧き出づる、萌え出づるものであらう。宗教の型に一應は導かれることはあらう。しかし、その型に本當の力を與えるものは内から湧き出づるものである。

三

ひしがれても、ひしがれても、尙、ひしがれないものは生きようとするこゝろである。生きようとする願いである。人間の、時に悲しく、時に、たくましい歴史は願いの歴史である。ひとのこゝろはもろもろの願いの渦である。はかないあすの日の願いをひめて人は夕べの寢りに入り、あかねさすあしたには、このひとひの願い満ちかしく祈つて、ちまたにさまよひ出でるのである。さて、このもろもろの願いは、おおかた、欲望と呼ばれるべきものであらう。佛陀は欲(tanha)を最も好まれなかつた。欲望の故に迷いの道にふみ迷うのであると常に誡められた。しかし、めざめたるもの(佛陀)の願いは欲望とは呼ばれない。欲望のめざめが佛陀によつて主張され

た。菩提ということばは、このめざめを呼ぶ東洋的なよび名である。不安と崩れの中にあつてひしがれない願い、欲望、それがそのまゝであれば尙一層、不安と崩れの基となつて盡きない。しかし、一面この欲望は生きようとしてやまない人間のどん底の力をさゝえていゝるものでもある。内なる力に属するものである。この欲望のめざめこそ人間のめざめである。人間のめざめこそ宗教の本義であると佛陀は主張されるのである。さて、欲望のめざめは純化されみ佛の切なる願いは二つにせんじつめられる。それは、「み佛の國を淨める」願いと、そして、「生きとし生けるものみなそのところを得て、素直に伸びきる」願い、すなはち、「衆生を成就する」願い。み佛のみ國は本來清らかなものである。淨らかなるこの花園は迷える欲望のために汚れた。汚れたるものは淨められなければならない。そして、その花園には色とりどりの華が艶やかに咲きいでなければならぬ。淨めに淨めてゆく願い。この願いこそみ佛の願いである。理想社會の實現。これは佛徒のみ佛の願いを通じての切なる願いである。理想の社會を實現せんとしていつの世も苦悶する。「維摩、病めり」の言葉はこの悲願のひびきである。今世代も亦、いつの世にも増してこの願いのために苦しんでいる。或は一つの世界、或は二つの世界という。しかし、佛徒にとつては世界は、法界は常に一つである。そして理想の社會も一つである。「淨土」の實現。本來のあべき世界への歩みは長からう。如何に永くとも道は唯一つ。この

道を行く。秋は暮れ、春はめぐり來るも行く道は唯一つ。なにがために、國土は淨められるべきか。咲くべき花の咲かんが爲に。

佛徒にとつて一切のものは一つとして捨て去るべきものがない。唯、そのものゝ本來のすがたが、力が、充分に伸びきらない状態をいたく離れやうとする。その障りを除こうとする。その障りを煩惱などと呼んでいる。一切のものも、ことも、人もあるべきすがたにあるべきである。それを障えているものを除いて伸びてゆこうとする願い。人について言えば、人格の完成。衆生の成就。この願いこそみ佛の願い。永劫の願い。大悲願。

「み佛の御こゝろはこの二つ願いのほかにない」とよき人は仰せられる。もろもろのぼさつさまの願も亦このほかにない。闇き混沌のこの世代にみ佛のこの願いのこえをきき、信じ、行じて、佛徒は力強く歩む。こゝに救いと建設の道が開かれる。

中村辨康 著 法然上人とその信仰

菊半截八十頁、定價三十圓、送料五圓

法然教學を餘すところなく現代的に説き示したる信仰者、布道家必携の書。再版の殘部も僅少成るべく早く御申込み下さい。

東京都港區芝公園五ノ十

發行所

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

芝園だより

◇出版の自由があたえられたとき
巷にはらんしたのほ、眞にわれ
われが求めるものではなくて、い
わゆるカストリ雑誌であつたとゆ
う現象、同じようなことが宗教の
世界にも現われはしなかつたか。
戦前に四、五十ほどであつたのが
戦後いつべんに二百四、五十には
ね上つたとゆうこの数字は、他な
らぬいはゆる新興宗教のインフレ
を物語る實相である。

◇出版の自由がカストリ雑誌を是
認しない如く、信仰の自由が群小
新興宗教を誦らせるものであつて
はならない。佛教思想雑誌として
信仰の道を歩む「浄土」がもつ使
命は大きい。私たちは時代の廣い
層に向つて會友の皆さんと共によ
びかけ、切實に信仰を求める魂の
聲に答えてゆきたい。

◇極東軍事裁判も終つた。尊い
くたの人命と血による狂亂の十年

の歩みは、いま文明の審判を受け
た。世紀の年をわれわれは反省深
く送りたいと想う。十二月八日と
ゆう日が、永い人類文明の歴史の
上にどおゆう意味をもつ日である
か。人間進歩の歴史に巨歩を印し
た釋尊成道の意義を心から顧みる
ことによつて、信仰においてたゆ
みなく淨められてゆく自己を感じ
てゆきたい。兩佐藤先生の論稿を
その意味において味讀されたい。
先生とともに大正大學教授。

◇信仰の歩みは、時代が困難であ
ればあるほど、一本調子にはゆか
ない。なやみもふかく、あゆみも
とよまり勝ちである。そおしたと
き、今月から開かれた信仰問答は
皆さんの身近かに感じられる問題
にお答えしてゆくものである。ど
うぞ卒直に、質問をよせて頂きた
い。眞野先生の今月の答は、念佛
者にとつてのひとしく感じている
ことえの好き指針であらう。

◇浄土の編集も、いよいよ新しい
年を迎えることになる。發刊の遅

れも漸くとり返すことが出來た。
少くとも三月分の原稿の用意がな
いと、定期月刊はむつかしいとゆ
うのに、一枚の原稿もなく、經濟
的にも同様な状態の中から、我々
同人はたゞ十四年の浄土の傳統と
その間かわらずつゞく讀者會友の
厚い心とを頼みとして、今こゝま
で夢中で走りつゞけてきた。

◇走り出してみると、正しい信仰
運動を昂め廣めてゆくとする會
友の聲援は相次いで起つてきた、
新しい會友が、購讀申込みが、徐
々ではあるが增加して來ている。
嬉しい限りである。私たちは、會
友のあふれる後援を期待して、内
容上にも外形面にもその充實に努
力してゆく覺悟である。

◇日本にとつて眞に新しい年を、
お互に迎えたいと念願します。浄
土にとつても發展の年であります
ように。(藤田)

一人が一人を

會友倍加運動に御協力下

さい

「浄土」 十二月號

昭和廿三年十一月二十日印刷

昭和廿三年十二月一日發行

(定價拾圓)

東京都港區芝公園五號地十番

編集兼 眞野正順
發行人 中村 辯 康

東京都千代田區錦保町三ノ二

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區錦保町三ノ二

印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都千代田區淺草町二ノ九

日本出版配給株式會社

東京都港區芝公園五號地十番

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

會員番號B一〇八〇一四

會費 金 百四十四圓
一ケ年

(送料を含む)

定價金 拾圓 (送料別)